

<レポート>

古代ギリシア文化研究所 第1回西洋古代史 インターユニ・ワークショップの開催について

佐藤 昇 (神戸大学・古代ギリシア文化研究所副会長)

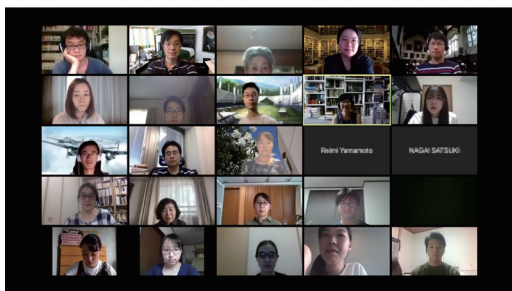
これまで古代ギリシア文化研究所では、古代ギリシア史(美術史なども含む)の専門研究者による研究発表会を年に1度、秋に開催していましたが、今回、初めての試みとして、卒業論文を準備中の学部生を対象として卒論構想発表会を開催しました。去る2020年8月2日(日)のことです。

近ごろ私たちは顔を合わせるたびに同じ懸念を繰り返すようになっていました。このところ西洋古代史を志す若手研究者がなんとなく少ないことか—そう危惧していた私たちは、何よりもまず西洋古代史に関心を持つ人々の裾野を広げ、できるだけ多くの学生たちに古代ギリシア・ローマ史の楽しさを伝える機会を提供したいとの思いを募らせていました。そうしたところから、今回、名古屋大学の周藤芳幸先生の発案でインターユニ(合同卒論相談会)を実施することになった次第です。卒論を準備している学生たちに簡単な発表をしてもらい、普段は触れ合うことのない各地の教員や同学の士と意見を交換することで、多様な意見・多角的な見方に触れ、柔軟にものごとを考えることの楽しさを感じてもらい、同時に、全国の同学の士と刺戟し合える場になれば、と考えて企画しました。ちょうどコロナ禍の最中ということもあり、移動制限が続いても参加者が参加できるよう、オンラインで会合を開くことにしました。感染リスクを回避することを主眼とするものではありません

でしたが、結果的に全国各地の学生・教員が移動の労を取ることなく一堂に顔を合わせる事ができたという意味では、今後の参考になる試みとなったと思います。

メインとなる卒論構想発表セッションでは、初の試みということもあってか、残念ながら4年生の報告は少なく、大学院生の修論構想発表を含めて3本の報告に留まりました。インターユニの開催については、研究所の会員はもちろん、会員以外の西洋史関係の先生方にも個人的にお知らせし、広く発表者を募ったつもりでいたのですが、趣旨をご理解いただけなかったのか、あるいは募集の仕方が良くなかったのかもしれませんが、いずれにせよ、この点は今後に向けて反省しなければいけないと思っています。なお、報告者以外では、2、3年生を中心に東北から関東、中京、関西まで各地の大学生たちが参加してくれましたので、来年以降に向けて少し光明が見えたような気もしました。実際に行われた報告そのものは、それぞれとても興味深いものでしたし、また、研究所会員からだけでなく、ローマ史を含む幅広い教員、先輩方からも有益なコメントをいただきました。感想を聞く限りでは、報告者だけでなく、その他の参加者たちもだいたい刺戟を受けたようです。

この企画は来年以降も長期的に継続して行くつもりです。とりたてて研究者を指す人だけを対象にしているわけではありませ



当日の参加者たち（一部重複）

ん。西洋古代史で卒論、修論を書こうという全国の学部生、院生の皆さんが広く楽しめる場、刺戟を受けられる場、交流できる場となるように工夫していきたいと思っています。（研究所 HP に簡単な活動記録が掲載されています。<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/ancient-greek/activity.html>）

以下、参加学生からの所感

Aさん

今回のセッションにおいて、私は、今年の12月に提出予定の卒業論文の構想を発表した。まず何よりも、西洋古代史の研究の第一線で活躍されている先生方や研究者の方々に前に、発表を行ったこと自体、卒業論文執筆に関する自身の今後のモチベーションにつながった。まだまだ至らない点の多い構想であり、緊張したが、発表後、類似するテーマでかつて卒論を書いた方から文献に関するアドバイスや、ある主張を支える根拠にまつわる議論の問題点や、卒論の構成にかかわるコメントなどもいただき、非常に貴重な機会となった。また、他の報告者による報告を聞いただけでなく、それに加えて、ご専門の先生方からのフィードバックや、該当分野の研究状況なども聞くことができ、興味深かった。

今期は、新型コロナウイルスの影響で、ゼミにおいて通常開催される口頭での中間発表が見送られ、自分の所属するゼミの学生がどのような分野に興味・関心を抱いているのかを聞く機会がなかった。こうした状況下、今回のインターユニ・ワークショップにおいて、自分の所属するゼミの学生についてだけ

でなく、普段なかなか交流する機会のない他大学の学生の様子を知ることができたことも、良い刺激となった。

今年度は4年生として、実際に卒業論文を執筆するが、今この時期に参加できたからこそ、今回の構想発表は、自分の卒業論文の構成を批判的に整理する契機となった。周藤先生のご講義をはじめとした先生方の様々なご助言の中でも、「いかなる『大きな事柄』に結びつく『限定的な』問いであり、何を明らかにしようとするのか」「どのような史料にもとづいた問いなのか」という視点が、今の自分に欠けており、かつ卒業論文執筆にあたって特に根本的に重要であるように思った。ワークショップ全体を通してたくさんの学びを得ることができ、こうした機会にまたぜひ参加したく思う。

Bさん

第一部の基調講演では、名古屋大学の周藤芳幸先生が、卒業論文の主題の選び方や書き方などについて、ご自身の経験も踏まえてお話しされた。四年生の私にとって、その話の多くは既に了解するところであるようにも思えたが、改めて勉強や研究の基本に立ち返るきっかけとなった。しかし一年生、二年生、三年生にとっては、特に教員の不足や疫病の流行下では、非常に貴重で新鮮な話となったであろう。第二部の合同卒論相談会では、私を含めて三人の学生が発表を行った。私の発表は稚拙であったが、複数人の方から様々な助言を頂いた。地方大学の先生方から助言を頂けるのは、遠隔通信の非常に良いところであろうと感じた。第三部の総合討論では、各先生

方や学生が自己紹介を行った。西洋古代史と一口に言っても、みな様々に興味を持ち、様々な研究分野があることを、一方では西洋古代史研究そのものが政治的・経済的・社会的に様々な危機に直面していることを、改めて認識した。閉会の辞では、桜井万里子先生が西洋古代史の興味深さや同人の大切さについてお話しされた。私も西洋古代史に惹かれていた身であり、感ずるところがあったが、そこには常に西洋古代史という枠組みそのものを内蔵する契機が含まれているようであった。

Cさん

基調講演の要旨を凝縮したような表現として「大きな問題に結びつく限定された問い」という言い回しが印象に残っている。日頃のレポート課題では「問いと答え」「根拠と論証」について考えることはあっても、その答えを既存の研究に「どう位置づけるか」「如何に体系化するか」ということを考える機会は多くない。また、史資料の欠落や言語的なハードルも無視できない西洋古代史において、学生の時間と

能力で収集・検討できる論拠には自ずと限界もある。些細なことに疑問を見だし、そこから問いを立てること。そして、その問いを大きな議論に結びつけること。卒論準備への心構えとして、非常に意義深いメッセージだと感じた。

合同卒論・修論相談会では、先輩方の研究テーマが具体的に示された。今回はいずれもローマ史であったが、法学者の社会的地位を先行する海外の学説に照らして検証する手堅い研究から、ナラトロジーによるローマ建国神話の構造分析、古代ローマの図像表現に見られる鴨のモチーフが持つ意味を探究するものまで、興味深い事例が幅広く紹介された。また、いずれの分野にもそれぞれ深い造詣を持つ先生がいらっしゃったことから、改めて西洋古代史の懐の深さを実感した。

大学を超えて他者の研究内容を知ることが、目新しさも相まって良い刺激になった。卒論について意識を向け始める3年生という時期に、このワークショップに参加できたことを幸運に思う。

<サマーセミナー参加記>

インターネットを通じた遠隔教育・研究会合の実践： 2020年の筆者の経験から

小坂俊介（名古屋大学高等研究院 特任助教）

2020年日韓中西洋古代史シンポジウムでの報告申し込みが受理されたのは昨年の9月のことでした。しかしその実現可能性について、今年に入ってから一抹の不安を感じていたことは隠しようもありません。3月には主催の韓国側運営より Invitation letter とプログラムが届き、開催に向けての先方の努力と配慮を拝察しました。残念ながら7月には延期の連絡が届き、サマーセミナーでの報告となったのはご承知の通りです。

今回の報告は、後期ローマ帝国における内乱とその戦後処理が社会に与えた影響、そして関連する法令が公布された個々の歴史的文脈の解明を目標としました。加えて西方での

ローマ帝国支配の終焉過程における、内乱の意義をめぐって見通しを示してみたい、という目論見もありました。質疑応答では、法令を政治コミュニケーションとし解釈する際の受け手側をどう定義すべきか、あるいは内乱に注目することによって見えてくる新たな理解とは何か、といった重要な問題提起をいただきました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。

さて、今年度のサマーセミナーは初のオンライン開催となりました。私の報告では、通常の学会報告同様にレジュメ+補足資料を用意し、レジュメのPDFデータをZoomの画面共有機能で提示しました。補足資料は基本的には画面には出さず、必要に応じて参照し

てもらえるようお願いしました。

このようなオンライン形式は、大学で教鞭を取る方々にとっては授業ですでに経験済みだったかもしれません。私も一度少人数の研究会で経験していましたが、しかしあまり慣れた気はしません。私は立教大学にて春学期に一つ授業を担当していたのですが、そこではリアルタイム配信ではない、いわゆる「オンデマンド」形式を採用したからです。以下は、現時点までの私の遠隔教育実践についての簡単な記録です。

5月からの春学期講義は当然、試行錯誤の繰り返しでした。最初の数回はデータ容量削減を重視して、Google Slide を利用したり、受講者に PowerPoint で作成したスライドの PDF + 音声ファイルを配布して再生してもらう形式を取りました。しかしいずれも不評で、結果、データ容量の大きさを承知しつつも、レジュメ + 音声付き PowerPoint ファイル (+ その動画版) を配布するかたちに落ち着きました。立教大学では Google の提供する各種アプリケーションを利用でき、動画を Google Drive を利用して立教大学学内に限定公開可能です (再生方法は YouTube に準ずる)。これが受講者にとってはやはり最も利便性が高かったようです。また、リアルタイムでの対応のための掲示板も設置しましたが、結局、その利用者は初回を除きませんでした。とはいえ、毎回受講者に提出してもらうワークシートにて質問を寄せてもらい、次の授業で応答しました。

秋学期からは引き続き立教大学、さらに名古屋大学にてリアルタイム + オンデマンド形式の講義を実施しています。リアルタイム形

式では Google Meet もしくは Zoom を利用し、スライドもしくはレジュメを画面共有しながら話します。オンデマンド形式では Zoom の録画機能を用いて動画を作成、そのデータを学内システムを利用して配布します。

秋学期から導入した新たな試みとして、タブレット端末を使用しての「板書」があります。iPad の画面を PC にリアルタイム同時共有させ、それを Zoom ないし Google Meet で共有する、という方法です。iPad に表示させた PDF に Apple Pencil で書き込めば、「板書」に近い感覚で講義できます (ただし、利用する PC のオペレーティングシステムに応じて iPad とのつなげ方が異なる。Mac については東京都立大学・大貫俊夫先生のブログを参照 (<https://ohnukitoshio.com/2020/05/13/01/>)、Windows の場合他のアプリケーションを介在させる必要がある。筆者は Let's View という無料アプリを利用)。

最後に付け加えたいのは、休憩時間を意図的に設定していることです。リアルタイム形式の場合は質疑応答の時間を兼ねます。オンデマンド形式の場合、配布するスライド・動画を 2 本もしくは 3 本に分割して提供しています (受講者が再生を停止すれば良いことなので無意味かもしれないが、ファイル一本化によるデータ容量肥大化の防止も兼ねる)。これは PC 画面に長時間向き合う私自身そして受講者の疲労軽減、また集中力の維持が目的です。これに関して受講者から不評は出ず、むしろ便利だとの声がありました。

以上、拙いながら現時点でのオンライン教育・研究実践の報告記録です。

<サマーセミナー参加記>

2019/20 年度西洋古代史サマーセミナー参加記

師 尾 晶 子 (千葉商科大学)

今年度のサマーセミナーは異例づくしだった。プログラムも開催方法もかなりぎりぎりになってから変更された。本来ならば、10月に開催予定であった日韓中シンポジウムにおけ

る韓国および中国の研究者の報告原稿の検討会として開催されるはずだった。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の終息の見通しが立たない中、とりわけ往来の自由の日処

が全く立たない中、5月半ばに主催者の韓国側から、延期ないしオンラインでの開催を検討しているという連絡が入り、さらに7月13日にシンポジウムの開催を1年延期するという決定が伝えられた。この段階で当初のサマーセミナーのプログラムは消滅し、代わりに日本側の発表予定者が報告内容のお披露目をおこなうという形へと変更されたのである。なかば義務感から報告に名乗りを上げたまではよかった。しかし、1年後に延期された報告の準備を中断せずにこつこつと続けるというのはかなり厳しかった。集中力が切れてしまった。

サマーセミナーは、Zoomを介しておこなわれた。会の運営自体はとてもスムーズだったと思う。また、会場に出向かなくとも自宅から参加できると言うことで、例年よりも参加者が多めだったということもオンライン開催ならではの特徴だったと思う。一方、土曜の午後ということで家族もいる時間帯での報告だったこと、上述のように本報告が1年先になってしまったテーマの報告であったこと、ということから、報告者としてはいささか緊張感に欠けてしまった。大きな反省点である。私の報告タイトルは「ペルシア戦争の記憶と《ヘレネス》意識の創造と展開」で、ペルシア戦争の記憶が、ポリスごとの語りから《ギリシア人の戦争》の記憶として語られるように転換・継承されていく過程の解明を目的と

<研究レポート>

EpiDoc 小話

小 川 潤 (東京大学大学院)

序

現在、古典古代史料のデジタル化に際して広く用いられている EpiDoc の歴史は 1999 年に遡る。この年、ローマにおいて国際ギリシア・ラテン碑文学協会に属する「碑文研究と情報技術委員会」の会合が開かれ、現存するギリシア・ラテン碑文を網羅するオープンアクセス・オンラインデータベースの構築を推奨する旨の宣言が発せられた。これに応答す

している。報告においては、問題設定の経緯とそこに潜む研究史上の問題点を語ることに時間をとられすぎたという反省があるが、多くの方からのコメントを得られたことはありがたかった。ただ、Zoom 上だとどうしてもマイクをオン・オフと切り替えながらの 1 対 1 のやりとりとなり、礼儀正しいけれども議論としては淡泊に感じるところもあった。対面での研究会であったなら、懇親会で遠慮のない濃密な議論を戦わせることもできたのだろうが、全員がばらばらな場所からの参加となるとこれは望めない。

2021 年度には果たして通常の形で学会や研究会が開催できるようになるのだろうか。第 12 回日韓中シンポジウムはソウルで開催できるのだろうか。Zoom や Teams での研究会の開催により、今年度は、これまでなら移動する時間の都合がつけられずに諦めていたさまざまな研究会に参加することができている。楽しい。その一方、対面で会う機会がない中、オンライン上での話は必要最小限にとどめられ、効率はよいけれども無駄から生まれる発想の楽しみといったものからは遠ざった生活を送っているようにも思う。おそらく今後数年は、対面で学会が開催されても感染を恐れてビクビクすることになるだろう。それでも顔をつきあわせた雑談・議論のできる機会がほしいと思う。

のデジタル化やデータベース構築を志す人々の関心を惹き、プロジェクトは実践段階へと歩を進めた。とくに、アフロディシアス出土碑文デジタル公開事業との協働 *EpiDoc-Aphrodisias Pilot Project* によってプロジェクトは大いに進展し、その後、現在に至るまで発展を続けている。

本稿において私は、この EpiDoc という注目すべきプロジェクトの大まかな輪郭を示すことを試みたい。もとより私は、EpiDoc ガイドライン策定に関わる立場にもいなければ、大きなデジタル史料構築プロジェクトに参加した経験もない。だが、日頃からデジタル・ヒューマニティーズに携わり関心を持つ者として、EpiDoc の中心メンバーや関係者と対話するなかで得た情報や、巡らせた思案を共有することには何かしらの意義があるのではないかと思う。ましてや、COVID-19 の流行によって研究活動におけるデジタル史料の利用機会がかつてなく増している中で、いまや古典古代デジタル史料構築の基盤の一つとなっているともいえる EpiDoc について知ることは、我々が検索・入手するデジタル史料の性質を知るために不可欠であるとも言えよう。

このような考えのもと、以下では「TEI との関わり」「テキスト構造化の理念および深度」という二つのテーマを軸に論を進めることとしたい。

1. EpiDoc と TEI、重なり合うコミュニティ

EpiDoc について知るためには、TEI についても知る必要がある。TEI とは、Text Encoding Initiative の略で、人文学テキストをデジタル化し、構造化する際に参照される国際標準規格、およびそれを策定するコミュニティの名称である。ここでいう「構造化」とは、テキストの構造や内容についての情報をタグで囲み、機械可読な形式で表現していく作業であり、例えば段落を表現したければ、`<p>…paragraph…</p>` と構造化する。非常に

多岐にわたる人文学テキストを構造化しようとすれば膨大なタグが必要になるが、TEI はこのタグについて、「○○の情報（上の例では段落情報）には、□□という名称のタグ（p タグ）を用いましょう」という約束事を、可能な限り汎用的に定めている。このような約束事を定めておくことで、作業員間の協働や作成されたテキストデータ間の相互横断的運用が容易になるのである。

そして EpiDoc もまた、基本的には TEI の約束事に従って構造化を行う。ただし、TEI では表現しきれない古典古代史料、とくに碑文史料特有の情報を記述するために、用いるタグの名称や機能の変更を行っており、この点で TEI そのものとは異なる。このように、特定の分野に特化して TEI を最適化したものは一般に「サブセット」と称され、いわば TEI の一部であるとも言えよう。

それゆえ、EpiDoc と TEI は密接不可分な関係にある。このことは技術・コミュニティの両面において然りである。技術面では、TEI が人文テキスト構造化のための汎用的な規格として策定されている以上、そこで開発された分析や可視化のためのツールは、EpiDoc を用いて構造化された古典古代史料にも基本的に適用可能である。一方、コミュニティ面についてみても、EpiDoc と TEI は重なり合っている。EpiDoc はただ規格であるのみならず、それを策定するコミュニティの名称でもあるが、その中心メンバーである Elli Mylonas や草創期のメンバーである Hugh Cayless は、TEI コミュニティにも積極的に関わり活発な意見交換を行っている。逆に、古典古代とは関わりのない分野の研究者が、EpiDoc のプロジェクトに深く関わるといった事例も見られる。

EpiDoc は、TEI というより大きなコミュニティの一部として、それと連動しつつ発展してきたのであり、これからもそれは変わらないだろう。そうであるならば、TEI に目を向けることなく、EpiDoc を理解することは

きまい。それゆえ、もし EpiDoc を用いて構造化されたデジタル史料の性質を十分に理解したうえで史料検索や分析を行おうとするならば、TEI による人文学テキスト構造化というより大きな枠組みにも意識を向ける必要があるという点は指摘しておきたい。

2. EpiDoc による構造化の理念と深度

EpiDoc が、古典古代史料の特徴に応じて TEI を最適化したものであるのは上述の通りである。では、その特徴とは何であろうか。

それは端的に言えば、テキスト校訂におけるライデン記法 Leiden Conventions の使用であろう。周知のように、ライデン記法は碑文やパピルス史料の校訂に際して一般に用いられる共通記法である。ガイドラインをみるに、EpiDoc はこの記法に基づく伝統的な表記との互換性を非常に重視しており、予め、構造化に用いるタグとライデン記法で用いられる記号の対応関係を定め、それに従って構造化を行うことを前提としている。そのためには、ライデン記法に厳密に対応するようなタグセットを独自に整備する必要があり、それこそが EpiDoc の主要な目的であると考えられる。このことは、ライデン記法と EpiDoc タグの対応表なるものが提供されていることから窺い知ることができよう。

つまり EpiDoc の中心課題はテキストの文献学的構造化である。そしてその基本理念は、ライデン記法による伝統的なテキスト校訂および

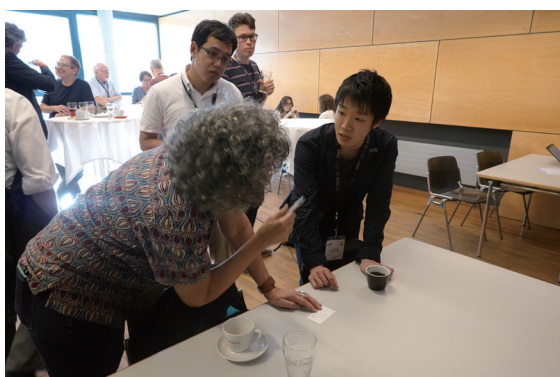
校訂版作成の手法を尊重しながらデジタル化を進めるというものであり、決してそれにとって代わろうとするものではない。この点は、中心メンバーの Gabriel Bodard も言明している。それゆえ、EpiDoc を用いたデジタル史料構築は、旧来の紙媒体の校訂版に含まれていたような史料の基礎情報と校訂テキストを最低限含んでいれば十分に成立するのであり、現に今日、EpiDoc を採用する碑文・パピルスデータベースの多くは基本的なメタ情報とテキスト校訂情報を構造化するに留まっている。

しかし当然、EpiDoc による構造化を通して、よりリッチなデジタル史料を構築することも技術的には可能である。これはつまり、史料中に現れる人名や地名、役職までも構造化し、場合によってはそうした人物や場所についてのテキスト外情報ともリンクさせることを意味する。そうすれば、史料を検索・表示しつつ、そこに現れる人物のプロソポグラフィ情報を同時に提示するといった高度な検索が可能になる。今のところ、このレベルでの構造化を行う事例は見られないが、近年の TEI の動向をみると、テキストの内容とテキスト外情報をリンクさせる手法が議論され、そのための新たなタグの導入なども進んでいる。すでに述べたように、EpiDoc と TEI は密接に関連しており、今後 EpiDoc においてもそうした実践が進む可能性は十分にあるだろう。

いずれにせよ、こうした情報をどこまで深く構造化するかという点については意見が分かれるところであり、最終的には個々の史料の性質やプロジェクトの目的に応じて決定されるべき問題であると言えよう。

結び

本稿は EpiDoc に関する様々な論点のほんの一部を取り上げたに過ぎないし、詳細についてはほぼ全面的に割愛した*。それでも、本稿で取り上げた TEI との関係性やプロジェクト理念、そして構造化の深度といった論点はいずれも EpiDoc の根幹に関わる問題であるから、大



オーストリア・グラーツで開催された TEI2019 にて、Elli Mylonas 氏（左手前）と筆者（右手前）。中央奥は現・東京大学史料編纂所助教の中村敦氏。

まかな輪郭を示すという当初の趣旨には辛うじて沿えたのではないかと思う。

読者諸賢が今現在、EpiDoc にどの程度の関心を寄せているのかはわからない。しかし、今後おそらく史料のデジタル化およびデジタル利用

がさらに進むなかで、もし何らかの形で EpiDoc に関わることがあったなら、本稿の内容を頭の片隅にでも浮かべていただければ幸いである。

* 詳細に関心がある場合は、EpiDoc ガイドライン <https://epidoc.stoa.org/gl/latest/> を参照のこと。

遠隔授業実施に関するアンケートのお願い

コロナウイルスの影響で、全国の教育現場では遠隔授業が導入されました。対面授業の再開されたところもありますが、いまだ遠隔を続けておられるところも多いだろうと思われまします。今後の参考とするため、会員の皆さんからアンケートを募り次号にその結果を掲載したいと考えています。つきましては、12月31日までに下記 URL ないしは右の QR コードより、アンケートページにアクセスして、是非ご回答ください。宜しくお願い致します。

(<https://forms.gle/2ynG4U1LpZy9ErDEA>)



<委員会関係>

【2019/20 年度第 2 回】

2020 年 8 月（メール審議）：(i) サマーセミナー開催について (ii) 委員について (iii) 『かいほう』の今後の予定と編集体制について (iv) 会規約について。

【2019/20 年度 総会】

2020 年 9 月 19 日（土）オンライン（Zoom）開催

- (1) 2019 年度の活動報告—(i) サマーセミナーと総会（2019 年 9 月 21 日、早稲田大学）(ii) 『かいほう』の発行：141~144 号 (iii) 委員会の開催：メール審議 (iv) 日韓中西洋古代史シンポジウムの延期をうけての対応 (v) 『かいほう』電子化・HP 関係について：進展なし
- (2) 会計報告・予算案一別紙資料に基づき説明があり承認
- (3) 2020/21 年度の活動計画案 (i) サマーセミナーの開催（2021 年 9 月）(ii) 『かいほう』の発行：40 周年記念記事・PDF 版のメール送信開始 (iii) 日韓中西洋古代史シンポジウム（2021 年 10 月）の準備
- (4) 古代世界研究会会則の改正：細則に事務局住所を記載
- (5) 2020 年度委員について：

飯坂晃治、大谷哲、長田年弘、後藤篤子、小堀馨子、齋藤貴弘、佐藤昇、高橋亮介、田尻信壹、田中創、長谷川岳男、福山佑子、古山正人、前野弘志、松原俊文、森谷公俊、師尾晶子

<編集後記>

米国の大統領が替る。海の向こうへの期待よりも、本邦での学術の中立性と存在を蔑ろにする足元への危機感が募る。遠隔授業アンケート、宜しく願いいたします。 <齋藤貴弘>